

## ディズニーランドと丸の内

森記念財団研究員  
脇本敬治

東京ディズニーランドに行くと、何か広々と感じないだろうか。足を一步踏み入れただけで感じる微妙な違いは何だろうか。ワールドバザールのお店の意匠などはそっくりアメリカから持ってこられているだけでなく、実は歩道やお店の細かなサイズまで、アメリカの寸法、日本よりも大きめのスケールでつくられているのである。

前回のコラムで、文化的な背景による空間の使い方の違いを述べた。日本に比べ、アメリカでは個体間の距離を大きめにとる。それ故アメリカのスケールをそのまま持ち込んでいるディズニーランドに行くと、日本人の我々は微妙に広々と感じるのである。アメリカに旅行した時に感じる、空間感覚、風通しの良さの様なものまでがそこにある。高い人気の背後には、そういったスケール感の違いが影響していると思う。

ディズニーランドと同じぐらい広いスケールの街は、実は東京にもある。丸の内から、皇居周辺がその一例である。特に皇居前広場から東京駅に通じる通りと周辺は、歩道が広くとられ、濠の水面と広場の芝生や樹木の緑が目にも鮮やかで、混雑したイメージからは程遠い。日本人の感覚からすると、都心の他の市街地とは異なった別世界の様に感じられる。

丸の内の街の魅力はどうだろうか。魅力を感じるのは空間のスケールだけでなく、他に工夫が必要なことがわかる。アメリカ並みのスケールだけでは広々と感じ、殺風景に思う人も少なくないだろう。丸の内には多くのお店が増えたが、以前はオフィスしかない街だった。通りを歩く人はサラリーマンが多く、しかも一階に多かった銀行は午後三時にシャッターを下ろしたため、散歩するには正直つまらない街だった。街の骨格となるスケールは広々と感じられる利点ではあるが、楽しく使うという点では面白味に欠けていたと思う。



皇居から東京駅に通じる空間は圧倒的に広い

この辺りはイタリアの街が、ヒントになる。イタリアの街の中心部には、カフェやパールなど人々が楽しく集う場所が必ずある。街を歩く時、楽しそうな人々の様子を見ることは、楽しみの一つである。きれいに飾られたショーウィンドウや、ディスプレイなども歩く人の目を楽しませる。美的なセンスを重視するイタリア人にかかる、街角が魅力的になる。しかも、アメリカほど空間を広くとるのでなく、日本と同じぐらい高密な状況をものともせず工夫を凝らしている。

近年の開発で、がらりと印象が変わった丸の内仲通りには、これらの要素が上手く取り入れられている。路上に席を出したオープンカフェ、ウィンドウショッピングが楽しめるお店。街路樹や植木鉢の緑を積極的に取り入れ、路上にはストリートファニチャーやオブジェが置かれている。もはや単なるオフィス街ではなく、歩いて楽しい街に変わっている。

ミッキーマウスが仲通りを散歩したら、日本人のセンスもなかなかのものだと言うかもしれない。



仲通りは緑が多く、ショッピングや散歩を楽しむ人が多くなった 仲通りの一角にあるカフェテラス

